

「農村工学をまだ知らない生徒たち」の案内

技術移転部 移転推進室交流チーム 小倉 力

今回は、「農村工学」という言葉をまだ聞いたこともない中高校生の見学来訪時の対応を、筆者の少年時代の「農業土木」の記憶を交えながら記してみたいと思います。

農村工学研究部門の見学者で中高校生は、年間5、6組でしょうか。校外学習の一環としてクラス単位、あるいは校内または県内複数の学校の理系に興味のある生徒のグループで来所されます。農業高校の生徒のように、専門教育の一環として来所される場合もありますが、たいていの中高校生は見学に来る前に「農村工学」あるいは「農業土木」などという言葉は聞いたことがなく、農業についてそのような事業が行われていることも知らないという場合がほとんどです。農研機構が扱う分野でも「農学」、「畜産学」、「獣医学」などは、単に内容を知っているだけでなく、将来その分野に進学したいと思って見学に来ている生徒も多くいるのと対照的です。

当部門に見学に来て頂いた場合、実験施設見学などに先だって、農村工学部門の概要を説明します。そのとき、「農村工学をまだ知らない生徒たち」を迎えたときにどうするか。せっかく縁あって農村工学の研究所に来て頂いたのですから、見学を機会にこの分野に興味を持ってほしいと思っています。農村工学関係者に説明するときのように、部門要覧を開きながら、農地工学、施設工学等々を順に説明しても、あまり関心を持って貰えそうにありません。そこで、農村、田んぼ、畑、水路などから話をしていくのですが、そのとき、学校の身近にあり、その学校の生徒なら誰でも知っていそうなことから話を始めるようにしています。



会議室での概要説明

(2017年7月 岩手県立盛岡第一高等学校)



実験施設見学

(2016年11月 八千代松陰高等学校)

学校単位のグループが見学に来る場合は、その学校の周囲の地図などを調べてみます。そうすると、例え都市近郊でも、「農村工学」、「農業土木」の歴史の積み重ねが、はっきり記されている場合が多くあります。また、農業水利事業や農地開発などが行われた地区に囲まれている学校もあります。身近にある田んぼや畑、水路がどうして作られたかを示

すことで、まず農村工学が身近な分野だと感じて貰うことを考えています。そして、それが地域にとって如何に重要であるか、なぜ今も維持されているか、また将来守っていく必要があるか、そしてそのために農村工学という分野があり、我々が研究をしているのかを説明することになっています。

さて、ここで私の自慢話をします。半世紀上も前の小学校低学年の時、「農業土木」という言葉は知りませんでしたが、「客土」、「泥炭地」という用語は知っていました。当時私が住んでいたのは北海道の山間の炭鉱町でしたが、同じ市内の平坦部の農業地帯では大規模な索道客土事業が行われていたからです。と、書いただけで何市かわかる方もいるでしょう。その市内に住む小学生として、「北海灌漑溝」の存在も知っていました。

索道は、たまたま事業が動いていて、土を運ぶ不思議なロープウェイに少年の好奇心をそそられたわけですが、市内からはるか続く広大な水田地帯、山の奥に住んでいた小学生としては憧れの光景でした。「農業土木」という言葉は知らなくても、その成果は輝かしいものに見えたのです。

田んぼや畑という身近なものが、技術開発の対象として、また研究者の好奇心を満たすものであるということ、そしてそれは時代とともに進化していくものであるということ、見学に来る中高生に伝えることができると常々考えています。

「農村工学をまだ知らない生徒たち」の皆さん、是非当部門においで下さい。



半世紀あまり前に筆者が住んでいたのは左写真奥の山の中です。そこは、今は人が殆ど住んでいません。しかし、少年が憧れた農業地帯では、農村工学の技術で農地の改良が続けられています。